

社団法人日本山岳会創立80周年記念式典



式典に先立ち、受付けは午後三時より始まり、式典開始までの二時間にわたって、会員たちは簡易バーや庭園散策などとして、それぞれ久闊を叙したり山の談義などを語り合って早くも和気藹々の祝賀ムードが盛り上がった。

式典は山田二郎副会長の司会で、午後五時、秩父宮妃殿下を瑞雲の間にお迎えして始まった。

記念式典

社団法人日本山岳会は明治三十八年に設立され、本年で八十周年を迎えた。

その記念式典と祝賀晩餐会がさる八月二十四日(土)、椿山荘(文京区関口2-10-8)で秩父宮妃殿下ご臨席のもと行なわれた。

八十年の伝統と幾多の栄光に輝く日本山岳会にふさわしく、国際色豊かに内外の来賓多数と四二〇名もの会員を集めて盛会であった。

(社) 日本山岳会創立八十周年

記念式典および祝賀晩餐会

秩父宮妃殿下ご臨席のもと

四二〇名が出席

最初に昨年十二月以降の二二名の物故者に対して黙祷が行なわれた。その物故者の氏名は次の通り。(敬称略)

相沢荘一 佐藤佳年 後藤恭夫
松本熊次郎 山崎秀直 道向和子
藤山愛一郎 下谷範雄 山崎安治
吉川公孝 栗飯原健三
宮季明 坂口圭正 鈴木静雄
金光正次 桂重英 青井竹三郎
養父孝太郎 下山隆己 高波隆男
伊藤洋平 田口邦彦

○今西寿雄会長挨拶の要旨

日本山岳会は今年で八十周年を迎え、世界第七位の歴史を有することになりました。本会は創立以来、わが国登山界のパイオニアと

してその発展に尽し、海外においてもマナスル初登頂をはじめ幾多の初登頂、初登攀の栄光に輝く記録もつくってきました。

しかし、この八十年の間には、わが国の登山活動も大きく変化し、技術的にも高度化し、無酸素で高峰に挑戦するなど、より困難な登攀が行なわれる一方で、国内では登山の大衆化が進み、その上、山岳医学や自然現象の観察、研究、調査など多面的なひろがりをもったものになって参りました。

また、目を転じますと、甚だ残念なことに悲惨な遭難事故もあつたをたず、さらにわれわれの愛する自然環境の破壊も目をはなせぬものがあります。これらに対する本会の果す役割も期待も、大きなものがあるかと思ひます。

このような時代に創立八十周年を迎えた私どもは一致協力して登山界の発展のため八十年の伝統にふさわしい山岳会として努力して参りたいと念ずるものであります。

何とぞ来賓各位におかれましては今後ともよろしくご指導のほどお願い申し上げます。

○秩父宮妃殿下のお言葉(全文・別掲)

続いて、例年は年次晩餐会に行



1985年(昭和60年)

10月号(No. 484)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150円

目次

- 創立 80 周年記念式典
および祝賀晩餐会……………(1)
秩父宮妃殿下のお言葉……………(2)
海外の山……………(4)
「八千仞峰はいくつある」「パミール
国際登山キャンプ」……………(4)
80 周年記念展覧会出品目録……………(6)
記念ピッケルの製作に当って……………(7)
80 周年記念「会員による
山の絵画・写真展」出品目録……………(10)
報告……………(11)
「80 周年記念展覧会」「80 周年『会員
による山の絵画・写真展』」……………(12)
「海外委定例講演会『植村直己君
のことなど』」「熊本支部夏季例会」……………(12)
東西南北……………(13)
追悼 伊藤洋平先生を悼む……………(13)
会務報告・ルーム日誌・会員移動……………(13)(14)
八十周年第二次募金応募者ご芳名……………(11)
図書受入報告 図書委員会……………(14)
お知らせ……………(15)
「ドイツ山岳映画の夕べ」など

▶日本山岳会事務取扱時間

月、火、木、土曜 10時～20時
水、金曜 13時～20時
日曜・祭日は休み

▶図書室開室時間

日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

お知らせ電話

234 六六五九

なわれる永年会員と名誉会員の発表がなされた。永年会員とは定款によれば在籍五十年の会員に、名誉会員とはとくに本会に対して功勞のあった人に対して贈られるもので本年は次の十一氏であった。
(敬称略)

(永年会員)	伊藤紀克	田口二
郎 加治甚吾	富田健一	塩田輔
雄		
(名誉会員)	田口二郎	谷口現
吉 浜野正男	望月達夫	織内信
彦 渡辺兵力	平沢亀一郎	

上に立ち、拍手のうちに今西会長からそれぞれ永年会員章と名誉会員章が贈られた。とくに平沢亀一郎氏は九十五歳の最年長で今なお元氣な姿で壇上にのぼられ万雷の拍手をあげた。

ついで、右の十一氏を代表して永年会員、名誉会員の資格をもった田口二郎前副会長が、「日本山岳会八十周年という大きな立派な年輪にめぐり合わせて大変幸福なこと、こういうめぐり合わせがなければ恐らくこういう大変な名誉なことも与えられなかったのではなからうか。こういう立派な喜びを与えて呉れた会に対して心から感謝するとともに、これからも会の発展と繁栄のために力を尽くしたい」と挨拶した。

最後に、本式典には多くの内外のご来賓の出席をいただいたが、時間の関係で、JACの監督官庁である文部省並びに組織上の上部団体の日本山岳協会からおおよそ次のような祝辞をいただいた。

秩父宮妃殿下のお言葉

日本山岳会が創立八十周年の記念すべき年を迎えられましたこと、心からお目出度うを申し述べます。

今日は今西会長を始め多数の会員の方々の元氣な姿に接することができましたことを誠に嬉しく思います。日本山岳会が登山愛好者により結成されて以来の様々な面での功績はここに申すまでもなく、国内の山はもとより海外での登山でも多く貢献して日本人の名を挙げ、かつ信用を高めて来られたことに心から敬意を表したいと思いま

す。昭和三十一年、待望久しかったヒマラヤ八千メートル級のマナスルに初登頂という輝かしい成果を挙げられました時の喜びは、時あたかも戦後の打ちひしがれた時代とて、国民が明るさと自信を取り戻した点で、今も忘れられません。

故宮様は昭和二十五年、日本山岳会の名譽会員に推薦を受けられました。スポーツ、とりわけ登山を好まれ、常に深い関心をお持ちで、大正末期から昭和初期にかけて、北アルプスやスイス・アルプスでのご登山は、ご生涯でも最もお楽しい時代だったと思います。と同時に今から六十年前のあの時代に、よくぞマッターホルンご登攀がお出来

になったものと思わずにはおられません。

なお、お亡くなりになって後は日本學術振興会により、秩父宮記念会制定の記念學術賞が設けられ、今も、毎年、山に関する顕著な研究業績を挙げた方を表彰されておりますが、これらの実施についても山岳会の関係者の変らぬご好意とご尽力に對しこの機会に感謝を述べたいと思います。

私は今春三月、思いがけずネパール結核予防協会の招請により同国政府の招待を受けて、結核予防会の總裁として親善のため四泊五日、ネパールを訪問致しました。幸い天候に恵まれ、名にし負うエベレストを始めヒマラヤの峰々を飛行機の窓からはつきりと望むことができ、宮様と一緒だったという思いで胸がいっぱいでございました。ポカラにも一泊してアンナプルナをバックにマチャプチャリなど明け方のほんの一時ながら飽かず眺めて参りました。終りに日本山岳会は今後も伝統を守り、内外に心身健全な仲間をつくりお互いにクラブライフを楽しまれますことを心から願って今日の祝辞と致します。

祝賀晩餐会

祝賀晩餐会と同じく椿山荘の瑞雲の間で行なわれたが、準備の都合上、席を移しての開催だった。開会は午後六時、司会は式典の山田副会長からバトンタッチした大塚博美副会長。

開会は、同じく全員起立して、秩父宮妃殿下をお迎えして始まった。

雰囲気は式典と違ってぐっとなごやかなものとなり、まず会員代表として佐々前会長が挨拶を行なった。

佐々前会長は前夜おそく中国のトレーニングから帰ったばかりの強行スケジュールとして挨拶の内容も挨拶としてはやや型破りの「中国についての所感」を中心にしてこれからのJACの若者たちへの激励の言葉を贈るかたちとなった。

来賓祝辞としては在日五年の英国大使館参事官の Anthony Mil-

「日本山岳会の皆さんの八十周年を心からお祝い申し上げ、今後の

「日本山岳協会の皆さんの八十周年を心からお祝い申し上げ、今後の

「日本山岳協会の皆さんの八十周年を心からお祝い申し上げ、今後の

「日本山岳協会の皆さんの八十周年を心からお祝い申し上げ、今後の

「日本山岳協会の皆さんの八十周年を心からお祝い申し上げ、今後の

「日本山岳協会の皆さんの八十周年を心からお祝い申し上げ、今後の

「日本山岳協会の皆さんの八十周年を心からお祝い申し上げ、今後の

「日本山岳協会の皆さんの八十周年を心からお祝い申し上げ、今後の

「日本山岳協会の皆さんの八十周年を心からお祝い申し上げ、今後の

「日本山岳協会の皆さんの八十周年を心からお祝い申し上げ、今後の

「日本山岳協会の皆さんの八十周年を心からお祝い申し上げ、今後の

Ington 氏が流暢な日本語で次のように述べた。

○英国大使館参事官 Anthony Mil-
lington 氏の祝辞

「本日はこの席にお招きをいただきまして誠に有難うございます。

英国大使代理として日本山岳会の創立八十周年記念式典に参加できますことは私にとって大変名誉なことでございます。

日本と英国人とは山を愛するという共通の趣味があります。皆さまご承知の通り、日本山岳会はその生みの親とも言うべき英国人の W・ウェストンを通じて創設の



永年会員章・名誉会員章を受ける受章者たち

発な活動を展開され、余裕時間の伸長とともに、若い人々の登山にさく時間は増え、会員も増え続ける一方です。

私は会の指導者の皆さまの献身的な活動により、日本山岳会のこれからの八十年は、これまでの八十年よりさらに輝やかしいものになるであらうと確信いたしております。

八十周年おめ

そもその始めから英国山岳会と深い関係にあります。ですから八十周年を迎えられた日本山岳会の皆さんに英国山岳会からのお祝いの言葉をお伝えできることは大変嬉しいことでございます。

地質的に大変古い日本の美しい山にくらべるなら日本山岳会の年令はまだ赤ちゃんに過ぎないでしょう。けれどもこの八十年間に日本山岳会は数々の偉業をなし遂げてこられました。地球上の主な山という山すべてを征服され、登山史に輝かしい業績を残してこられました。日本山岳会は現在も活

でとうございます。」

引き続いて内外から寄せられた多くの祝電披露が行われた。まずアメリカ山岳会々長ロバート・W・クレイグ、副会長アンドリュ・エンブリック両氏の次のような祝電が読み上げられた。

「日本山岳会創立八十周年に因んで挨拶します。

秩父宮妃殿下、日本山岳会の役員並びに会員の皆さま、日本の登山家の皆さま、アメリカ山岳会はこの記念すべき日に心からお祝い申し上げます。アメリカ山岳会が代表を送り直接ご挨拶できないのは誠に残念であります。日本山岳会の栄えある歴史をたえ、また、あらゆる地域で素晴らしい技術を披露し、数々の成功を納めておられる日本の登山家をたたえるものとして、そして、またお互いに尊敬し合う両国の登山家同士の将来にわたっての強い絆をたえるものとしてこのメッセージをお受けとり下さい」

なおその他多数の祝電が寄せられたが、その一部は次の通り（敬称略・順不同）。

中国登山協会主席 喬加均、副主席史占春並びに許競、ドイツ山岳会会長 Dr. フリッツ・メルツ、Dr. フォスコ・マライニ並びにイタリア山岳会、韓国山岳会孫慶錫、アメリカシエラクラブクロード・トニールック、日本体



祝賀晩餐会で挨拶する佐々前会長

会長より当日ご臨席の秩父宮妃殿下に贈呈された。

その後、三田幸夫名誉会員の音頭によって乾杯が行なわれ、これで一応の公式のセレモニーは終わり、恒例の食事と懇談に移り、会場は一転して賑やかになった。ただ例年の中華料理でなく、フランス料理であったので、いつものように交流はできないが、シェーベルト作曲の弦楽二重奏の静かに流れるムードあふれる中に、テーブルマスターを囲んでの歓談とあった。

そして宴けなげに、本日の呼び物「トライビジョン」が頭上左右八面の大きな壁面に大きく放映されて会場は再び静かになった。内容は JAC 八十周年の回顧と今後百周年にむけての展望で、マナスル、ナンダデビイ、チョモランマ、カンチェンジュンガなど栄光のシーンには万雷の拍手がわいた。苦心のトライビジョンは大成功であった。プロデューサーは松田雄一、T

山をきれいにグミは持ち帰ろう

○小倉茂暉、ディレクター新井陽一郎そしてフィルムの提供者は各支部、渡辺正臣、大森弘一郎、武居台三の各会員であった。

このトライビジョンのために、秩父宮妃殿下のご退席が予定を十分も越えて午後八時十分となつてしまったのだが、幸い、妃殿下にはことのほかお喜びの様子とお見受けした。

妃殿下のご退席後も賑やかな談笑は続き、大塚副会長の名司会によつて宮崎新支部の紹介、ルームで開かれている「記念展」「会員による絵画・写真展」や韓国山岳会常任理事冒斗鉉氏さらには今年ちょうど八十歳になった会員(後藤幹次、島田興、桜井信雄、山口

健児、青木昇、今井喜美子の各氏)の紹介などありJAC八十周年祝賀にふさわしい楽しいものであった。晩餐会終了は午後八時三十分。

(記録 小倉 厚
写真 羽田 栄治)

【新永年会員紹介】
伊藤紀克氏(一五七四番)

明治四十四年十月十七日生

北海道帝国大学卒

昭和十年二月入会

紹介者 逸見真雄、徳永正雄

田口二郎氏(一五九〇番)

(名誉会員の欄で紹介)

加治甚吾氏(一五九三番)

明治四十一年三月二十

二日生

東京慈恵会医科大学卒

昭和十年六月入会

紹介者 高木文一、黒田孝雄

富田健一氏(一六二五番)

明治四十一年四月二十

二日生

昭和十年十一月入会

紹介者 津田周二、中原繁之助

塩田輔雄氏(一六二二番)

明治三十八年十二月十三日生

海外の山

八千^{メートル}峰はいくつあるか

地球に八千^{メートル}峰は、一体いくつあるか、なんていまだに言い出すと目をむかれそうだが会報六月号で「メスナー八千^{メートル}峰全山登頂まであと二座」と書いた手前、いささか気になっていた。

たまたま近着の英「マンウンテン」誌一〇四号の中で、アラン・ラウス氏が「世界の高峰」と題して七千^{メートル}峰、八千^{メートル}峰の一覧を作っており、そのリストでは八千^{メートル}峰は何と二十二座を数えている。

エベレストからシシャパンマ(ゴザインタン)まで古典的な「十四座」のほかに入つた八千^{メートル}峰が存在するわけだが、もちろん見方によっては他の八千^{メートル}峰に付随する「こぶ」ととられても仕方がないものも含まれている。

高い順から名をあげると、ヤルンカン(八五〇五^{メートル})、カンチエンジュンが中央峰(八四八二^{メートル})、同南峰(八四七六^{メートル})、ロツエ中央峰(八四三〇^{メートル})、ロツエシャル(八四〇〇^{メートル})、アンナブルナ中央峰(八〇五一^{メートル})、同一峰東峰(八〇一〇^{メートル})、ブロードピーク中央峰(八〇〇〇^{メートル})の八峰である。

このうち処女峰が一つだけある。すぐわかる人は、かなりのヒマラヤ通と言つていいと思うがいかがですか。

そう、ロツエ中央峰はまだ誰にも登られていない。主峰とロツエシャルの中間に位置するこのピークを仮に独立峰とすれば、ナムチェバル

ワ(七七五六^{メートル})をはるかに抜いて世界最高の未踏峰それも唯一の八千^{メートル}峰となるわけだ。

ピークとは何かという定義をもう一度考えなければならぬところだが、これらのピークの最低条件となっているのはエベレストの南峰のようにメインピークに登る過程でついでに登れるでつぱりではない点と思われる。たとえばロツエ中央峰は、南壁からダイレクトに登るから、ロツエであるいはロツエシャルに登ってからさらに鋭いリッジついに頂上をめざすしか方法がない。

深田久弥さんは「私はヒマラヤ八〇〇〇^{メートル}以上の峰は十四座と決めている。そしてそれが一番妥当だと思っている」と書いています。私たちもまた、十四座を既定の八千^{メートル}峰リストとしているわけだが、それらに入らないヤルン・カン、ロツエシャルなどは次第にその八千^{メートル}峰としての存在を明確にしつつあるように思われる。

考えてみれば、たとえばロツエ(チベット語で南峰の意味)は、スプツエ(西峰)、チャンツエ(北峰)と共に、チョモランマ(エベレスト)の衛星峰として命名された山である。そのロツエのさらに中央峰が注目される時代が来るとは、先人たちが想像しなかつたろう。ヒマラヤ登山の発展が、新たな八千^{メートル}峰を作り上げてきたとも言えるのである。

八千^{メートル}十四座であつてもいいじゃないかという人は多いが、ネパールはじめ受け入れ国がすでに「ニュー八千^{メートル}峰」に独自の登山許可を出している現状では、やや時代に合わない面がある。

(十四座とは、エベレスト、K2、カンチエンジュンガ、ロツエ、マカルー、チョ・オユー、ダウラギリ、マナスル、ナンガパルバット、アンナブルナー、ガッシヤブルムI、ブロードピーク、シシャパンマ、ガッシヤブルムIIの各峰)

(江本嘉伸)

東小野田実業補習学校卒
昭和十年十二月入会
紹介者 佐々保雄、山崎春雄、
中野征紀

〔新名譽會員紹介〕

田口二郎氏 (一九五〇番)

大正二年 (一九一三) 二月十四日生。東京帝国大学卒。入会は昭和十年、紹介者は藤島敏男、松方三郎の両氏。昭和二十六年より二十七年まで理事、同四十五年から五十二年までと、同五十四年から五十五年、および本年四月より現在に至るまで評議員。その間、昭和五十六年から五十九年まで本会の副会長を務めた。

旧制甲南高校時代より北アルプスや南アルプスなど日本の山での数多くの登攀だけでなく、スイスベルナーオーバーラント、ヴァリスアルプス、ベルニナアルプスにも足跡を残し、本会のマナスル遠征に際しては、踏査隊、本隊に加わり、ヒマラヤにも足を伸ばした。

谷口現吉氏 (一六三六番)

明治四十三年 (一九一〇) 九月十七日生。慶応義塾大学卒。入会は昭和十一年、紹介者は横有恒、三田幸夫の両氏。昭和二十五年より同二十七年まで理事、昭和二十八年に評議員を務めた。

日本では北アルプス、奥穂高での冬期露営や、北穂高岳山頂、剣岳八ッ峰での活動など顕著な登山

を重ね、本会の第二次マナスル遠征のときは隊員としてこれに参加した。

浜野正男氏 (一七三〇番)

大正二年 (一九一三) 一月十三日生。立教大学卒。入会は昭和十三年、紹介者は逸見真雄、松方三郎の両氏。昭和二十五年および同三十五年から三十七年まで理事、同五十年から五十二年まで評議員。

昭和九年に北アルプス、剣尾根を初めて手掛けるなど、昭和初期に積雪期を含めて数多くの登山を行ない、昭和十一年には立教大学ナンド・コット遠征隊員として、仲間とともにその山頂に立った。

望月達夫氏 (一七三九番)

大正三年 (一九一四) 三月九日生。東京商科大学卒。入会は昭和十三年、紹介者は吉沢一郎、黒田孝雄の両氏。昭和二十五年から二十八まで理事、同三十二年から四十九年、同五十四年から五十七年、同六十年から現在に至るまで評議員。その間の昭和五十年から五十三年まで本会の副会長を務めた。

昭和十年前後、日本アルプスの鹿島槍や穂高岳、北岳のバットレスなどを中心に活躍した。著書に「遠い山 近い山」、訳書に「ロンゲスト」の「わが山の生涯」など、数多くの著作がある。

海外の山

パミール国際登山キャンプ

一七千メートル峰の連続登頂

田部 井 淳子

今夏七月十二日から八月二十三日までソ連国際登山キャンプ (パミール) に参加した。

パミールの山はすでに日本から何隊も出掛け、レポートもたくさんあるのでご存知の方が多いと思うが、私たちが (女性三名の隊) のパミール・レポートを紹介したい。

ソ連は今夏パミール、カフカズ、チングラク、アルタイの四地域に国際キャンプを設けた。その中で一番人気の高いパミールはプログラム (1) レーニン峰、(2) コルジエネフスカヤ、コミュニズム峰、(3) アライ山脈の三つのプログラムに分かれている。

今までの、経験者の話や、レポートによると、パミールの問題点は①日程が限られていること、②移動がヘリコプターで行なわれ、ヘリの確保が大変であることの二点であることが解った。天気は安定しており、高所順化さえうまくすれば複数の七〇〇〇メートル峰へ手軽にゆける唯一の地である。一シーズンに三つの七〇〇〇メートルを登るには日数が必要なのだ。そこで昨年の暮に参加を申し込む際、私たちは女ばかりのパーティで歩行速度が遅いこと、日本は高所順化を実施する場がないので日数を延長したい旨の手紙を添えて申し込んだ。ソ連は連絡をとるのに時間がかかるという噂とは違い、わずか一週間のうちに国際電報で延長はOK (延長費は一日二〇ドル、参加費は一律一四〇〇ドル) の返事が届いた。その後のやりとりも返事はすべて電報であった。折良く今年の五月ダージリンで開かれたヒマラヤ登山観光会議に出席した私はこの会議にはじめて出席したソ連登山協会前会長クタム氏、現会長のミシロフ

スキー氏と昵懇になり、ヘリコプターのアレンジ、登攀ルートについて、直接伺うことが出来た。ミシロフスキー氏は「ソ連エベレスト隊の登攀隊長で登頂者でもある。またむずかしいことで定評のあるモスクワ峰には氏の開拓したミシロフスキールートもあり、ハンテングリ、ポベドグ峰にも登っている実力者である。このミシロフスキー氏に事前に私たちの行動表を送付しておいたのだが、なんとその行動表に赤字で訂正を加え、写真にルートを明記し、わざわざホテルまで二度もアドバイスに来てくれたのには感激した。

指定された日にモスクワに集合した各国からの参加者は一緒に飛行機でオーシ、アライ谷と運ばれ、バスに分乗してレーニン峰のBCとなるアチクタシ (三七〇〇呎) へ到着する。エーデルワイス、忘れな草の咲いている広い台地に参加国の国旗がなびき、ソ連側スタッフのテントも含めると約八十張のテントが整然とならんでいた。今夏のパミール参加国は十七ヶ国、三十一人の参加で女性内約四〇名。日本は五隊二十五名であった。東欧の参加者が圧倒的多数である。

このアチクタシで登山中の食糧品を購入し、各隊の代表とソ連スタッフの打合わせを行ない、各隊の予定に応じてモスクビン、フォルタンベックのBCにふりわけられる。コミュニズム、コルジエネフスカヤの両方に便利なモスクビンは八〇人しか収容できないため、希望通りにならないこともある。幸い私たちは小パーティのためモスクビンに入ることが出来た。ここでソ連側スタッフのチェックを受ける。最初の山、コルジエネフスカヤ (七一〇四呎) は高所順化を兼ねて第一キャンプ (四九〇〇呎)、第二キャンプ (五八〇〇呎) へ荷上げを行ない正味八日間を費し七月二十八日ピークに立つことができた。安原、柳沢隊員にとつてはじめての七〇〇〇メートル峰である。第三キャンプが六一〇〇呎だから頂上までの高度差一海外の山

織内信彦氏(一八四六番)

明治四十五年(一九一二)二月一日生。東京農科大学卒。入会は昭和十五年、紹介者は小島久太、広瀬潔の両氏。昭和二十六年より二十七年まで理事、同三十五年より三十九年、同四十四年から四十七年、同五十二年から五十五年、同六十年から現在に至るまで評議員。その間の昭和四十八年から五十一年まで本会の副会長を務めた。

昭和二年の前穂高岳から槍までの縦走をはじめ、谷川岳でも登山活動を行なうなど、昭和初期の日本の山々で数多くの登山を行なった。著書に「偃松帯」、快晴の山」がある。

渡辺兵力氏(三〇二九番)

大正三年(一九一四)七月二十七日生。東京帝国大学卒。入会は昭和二十二年。昭和四十五年より四十七年、同五十二年から五十三年、同五十八年から現在に至るまで評議員。昭和五十四年から五十七年まで本会の副会長を務めた。

日本山岳会創立八十周年

記念展覧会出品目録

場所・日本山岳会ルーム
会期・自昭和六十一年八月二十二日(木)
至昭和六十一年八月二十七日(火)
時間正午～午後八時
(最終日は後五時まで)

(一)内は提供者、敬称略
(二)のない項目は日本山岳会
所蔵または記念展準備委員会作成
日本山岳会の歴史

で評議員。昭和五十四年から五十七年まで本会の副会長を務めた。

昭和七年の谷川岳一ノ倉沢奥壁の積雪期登攀、国後島のチャチャヌプリ積雪期登山などで活躍。そのほか昭和三十一年の第一次南極観測隊にも参加する。昭和五十五年の本会チョモランマ遠征では隊長として、BCでその成功を見守った。著書に「垂直と水平の道」、「山・スキー・道」。

平沢亀一郎氏(三七二一)

明治二十三年(一九九〇)十二月二十二日生。北海道帝国大学卒。本会仙台支部名誉会員。

主として台湾の山に登る。主なものは玉山(新高山)、大霸尖山、大武山、雪山(次高山)、南湖大山だが、台湾の山には全て登った。著書に「台湾の山と私」がある。九十五歳になる今も、支部で催す会合には、体の許すかぎり出席し、その熱意に若い支部会員の多くが心暖められ、士気を鼓舞されている。

海外の山
〇〇〇メートルの往復である。空身になっても体はきつく、頂上着は午後六時三十五分だった。この経験が次のコミュニティズム、レーニン峰で抜群の効果を上げた。三日間の休養の後コミュニティズムはかっこよくアルパインスタイルで、紅茶バックの紙まではがし、食器はテルモスのふたを使うという軽量化を行ない各キャンプ一泊ずつで八月七日に登頂。前々日の八月五日コミュニティズム頂上直下でスペイン人が滑落死亡する事故があり緊張した。この遺体は一人のソ連人トレナーによって翌日、プラトリー(六一〇〇)まで運こばれ、ヘリコプターでオーシ、モスクワに移し事故発生後二日目にして遺体はモスクワに着くという早業であった。レスキューシステムの強固さには目をみはるものがあった。

八月十日フォルタンベックに下ると、待つていたヘリでアチクタシへ運ばれ一日休養、翌日から五日間でレーニン峰を往復した。各山ともレスキュー隊としてソ連スタッフが常駐しており心強い。彼等の強いこと、平均年齢が高いことも驚きの一つだった。彼らのほとんどは二ヶ月の夏休みを利用してきた各地の山好きで、職業もまちまちだが、大学の化学の教師、エンジニア、プログラマーなどエリートが多く、ほとんどが三十代後半から四十代である。四十代そこそこでもう年だからと口先きクライマーにならないのはうれしい。同時期にパミールに来ていた高山研隊の原真氏や高橋和之氏も四十代で一気に三山登りまくったのは小気味良かった。

日本山岳会年譜

(松田・中村作成)

〇日本山岳会創立者の肖像写真

〇日本山岳会歴代会長の肖像写真

〇日本山岳会会員章一覧

〇W・ウェストン自筆扇面

(松本市立日本民族資料館)

〇明治四十五年八月 ウェストン有

明登山の記録(石田吟松スケッチの複写)(高山忠四朗)

〇カンチェンジュンガ(エッチング)

〇シュラーギントワイト

〇初冬の両神山(油絵) 茨木猪之吉

〇群狼、鳥(墨絵) 石井鶴三

〇北穂高岳主峰(油絵) 足立源一

郎

〇或朝の槍ヶ岳(油絵) 足立源一郎

〇一九二六年八月マッターホルン頂上並びに稜線上の秩父宮雍仁親王殿下(写真2葉)

〇会員スナップ(松方三郎・日高信六郎・神谷恭・藤島敏男・加藤泰安・折井健一・横有恒・三田幸夫等)(安彦六郎) 寄贈

〇南極オングル島の石(一九五七年)(渡辺兵力)

〇マナスル頂上の石(一九五六)

〇エベレスト頂上の石(一九七〇)

(大塚博美)

〇チョモランマ頂上の石(一九八〇)

海外の山

〇カンチェンジュンガ頂上の石(一九八四)

〇ガウリ・サンカル頂上の石(一九八四)

図書・原稿

〇志賀重昂著「日本風景論」(明治二十七年刊) 2冊

〇W. Weston "Mountaineering and Exploration in the Japanese Alps" (1896)

〇高頭 式編「日本山嶽志」(明治三十九年)

〇W. Weston "Playground of the Far East" (1918)

〇小島島水著「日本アルプス」

創立八十周年

記念ピッケルの

製作に当って

本会創設八十年の年に当り、何か記念の品を作つて後世に残したいと思ひ、色々考えた末に特製のピッケルを作つて會員の皆様へ頒布することを思ひ立ちました。早速準備にかかり、製作は札幌の門田製作所に依頼し、材質はニッケル・クローム・モリブデン鋼を使つて、型はクラシック・スタイルとし、シヤフトはタモ材を使うことにして発注致しました。幾度かの試作を重ねた結果、入念の作品となりましたので、皆様の生涯の山の伴侶にとご案内申し上げた次第です。

ところが当初そんなに本数がまとまるとも思はず多寡を括つて百本限定でご案内したのですが、蓋を開けてみますと、案に相違してご要望が相継ぎ、結果的に北は北海道から南は沖縄に至る多くの會員から五百本を超えるのお申込みを頂戴した次第です。

これ偏に委員の経験不足と見通しの甘さに起因することと反省致しておりますが、しかし今

更これを百本に限定することも大変に困難なことであり、且つ會員皆様のご要望切なるものがあると思はれ、これにお応えするの委員の使命と考え一応全数調製致すことに考えを変更した次第です。そのため限定品としてご希望された皆様には大変なご迷惑をお掛け致してしまい、また、一本一本手打ちにて調製する関係から、月に五、六〇本の生産量に限られ、全数仕上がるのは来年四月頃と大変長期にわたることとなりました。

しかし数々の苦勞の末、八月には最初の発注分が完成し、その第一号製品を過日椿山荘における創立八十周年記念晩餐会の席上において秩父宮妃殿下に献上致すことが出来ましたのは担当委員として大変に喜ばしく思つて居ります。そして来年の四月頃に最後に出来上ります一本には、シヤフトに記念のプレートを取付け、会のルームに永久保存致すこととしております。

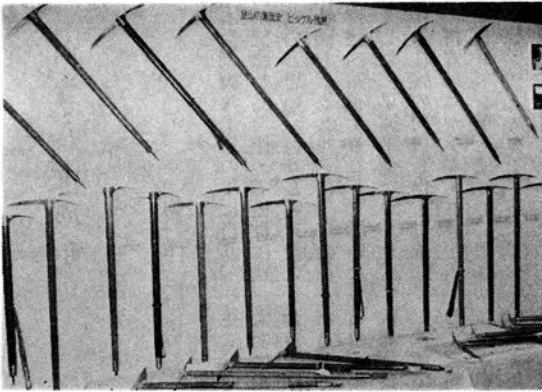
(ピッケル担当委員 入澤郁夫)

- (明治43年〜大正4年) 全4巻
 ○「山岳」第一〜四年第一号4冊
 ○日本山岳会編「高山深谷」(明治43年〜大正6年) 第1〜8集
 ○ウェストン書簡(富田健一)
 ○英国山岳会晩餐会の寄せ書(富田健一)
 ○高野鷹蔵「日本山岳会誕生の経緯」遺稿(高野岳雄) 寄贈
 ○辻村伊助「続スウィス日記」遺稿
 ○藤本九三(昭和26年)並びに尾崎喜八(昭和46年)「ウェスト祭」原稿(高山忠四朗)
 ピッケル・アイゼンの歴史
 ○F・エルク(初代)加賀正太郎旧蔵
 ○シエンク 榎有恒旧蔵
 ○ヘスラー 上田哲農旧蔵
 ○ヘスラー 上田しのぶ 寄贈
 ○ヘスラー 高野鷹蔵旧蔵
 ○A・エルク(二代)「中村純二」
 ○ペント(二代)「寺田貞之助」
 ○ワイリツシュ(初代)「平柳一郎」
 ○山内一号 大賀寿二
 ○門田一号(無銘)和久田弘一旧蔵
 ○シエンク (札幌スポーツ博物館)
 ○シエンク 平柳一郎
 ○シエンク 海野治良
 ○シエンク 高橋 照
 ○山内二七五号 (細谷健太郎)
 ○山内三六五号・七一三三・一二二



記念展覽会場風景

- 二〇号・二一八二号及び昭8作
 無番号
 ○山内七二〇号 平柳一郎
 ○山内一一三三三 大森正義
 ○山内二一五七号 高橋憲二
 ○山内一五五七号 葛西森夫
 ○山内一八二六号 松永敏郎
 ○山内一九五八号 畠中善弥
 ○山内一九五八号 登米正彦
 ○山内一九六〇号 (樋口陽一)
 ○山内二一〇〇号 (樋口段子)
 ○山内二〇六五号 (佐々木郁夫)
 ○山内二一七七号 (阿部郁夫)
 ○門田3本 (平柳一郎)
 ○門田作八十周年記念試作品
 ○シエンク頭部(頭抜き) (門田 茂)



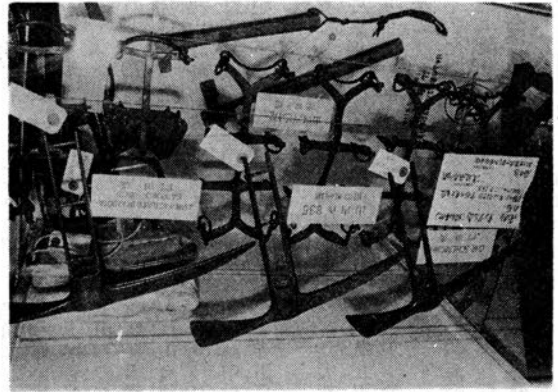
(ピッケルの展示)



記念展覧会 (図書・原稿の展示)



(女性登山史関係展示品)



(ピッケル・アイゼンなどの展示)

- 門田頭部 (頭抜き) 初期作
- 山内頭部一七〇号及びスピッツ
- 山内頭部八三五号
- 門田1号アイゼン無銘
- 山内6本爪アイゼン・山内ロックハンマー・山内鉤物用ハンマー
- 山内アイゼン八本爪
- 山内アイゼン八本爪及び十本爪
- 山内翁記念碑写真 (柴崎 徹)
- 門田茂翁写真2葉 (平柳 一郎)
- 女性登山史
- 年譜
- 写真
- 鉦・チョッキ・ブラウス・金剛杖・ピッケル・シール・写真
- ワカン・カメラ・アイゼン・写真
- 地図4葉・写真
- ゲートル・登頂証明書・写真
- 地下足袋・わらじ・ぞうり・スパッツ・ゲートル・ロングスリーブ・脚絆・オーバースーツ・尻皮・写真
- アイゼン・写真
- 写真
- 女性登山家著書リスト
- 科学・装備
- 自動確保装置 (マウンテン・シヨック・アブソーバー)
- 天気図ファクシミリ (ALDEN社九三二一型)
- パーソナル無線機 (三菱ウイスパーノット)
- 一九七〇年日本山岳会エベレスト登山隊装備 (羽毛服上下・ヘルメット・酸素マスク・ミトン・高所靴・背負子・ピトン4ヶ・ビニロンシート)
- 一九七五年日本女子エベレスト登山隊登頂時装備 (防風帽・酸素マスク・レギュレーター・ボンベ・ヤッケ・オーバーシューズ・ミトン・オーバースーツ・アイゼン・背負子・ザック・サングラス)
- アルパインスタイル装備 (目出帽・ヘッドランプ・羽毛服・オーバーシューズ・羽毛ミトン・ロングシニパッツ・高所靴・ザック・露営用具一式・安全ベルト・ロックハンマー・フレンズ3ヶ・ナッツ20ヶ・カラビナ7ヶ)
- 大クラック用大型ナッツ
- チタン製アイスピトン2本
- 植村直己がマッキンリー頂上に立てて来た日の丸と米国旗 (広



(科学・装備関係の展示物)



(女性登山史関係資料)



(女性登山史関係展示品)



(未来の登山関係展示物)

江隊回収品

〔植村公子〕

○植村直己がマッキンリー雪洞に残置した装備類(防寒帽・ヘッドランプ・ヤッケ上下・スパッツ・毛手袋・テントシューズ・シュラフ・西洋カンジキ・氷鋸・スノーバー・ユマール・アイスピトン・カラビナ・シャベル・ラジウス2台・コッヘル・食器・フィルム)(植村公子・KKスーパー・スタッフ・カムパニー)

高所医学

○低圧順応トレーニング(高山病予防への実験的一試行)パネル展示。本文・写真5枚・図表17

枚(筑波大浅野勝己作成)

海外遠征

- 年譜(一九六六～一九八五)
- チョモランマ北壁隊(一九八〇)写真
- カンチエンジュンガ縦走(一九八四)写真
- ガウリサンカル(一九八四)写真
- ボゴダ山群(一九八一～一九八四)写真
- ユマール・エイト環(小原俊)
- アイスパイル2本・ピトン
- 未来の登山

〔勝山康雄〕

○未来の日本山岳会会室イラスト

(神崎・遠藤作成)

○20年後の日本山岳会

○20年後の登山

○日本山岳会会員分布図(60周年時並びに80周年時)

自然保護

○武甲山の今昔(写真)

〔清水武甲〕

○富士山の車道(写真)

〔松下電器〕

○北アルプス・南アルプス・富士山の自然破壊(写真)

〔渡辺正臣〕

○白神山地のブナ(写真)

〔江川正幸〕

○祖母・傾山系の伐採(写真)

〔中村純二〕

○フィールド・マナー・ノート

ビデオ

○チョモランマ北壁隊(一九八〇)の記録

○カンチェンジュンガ縦走隊(一

九八四年)の記録

○自然保護委の武甲山視察(昭和60年5月)

○空撮北アルプス

〔大森弘一郎〕寄贈

○九州の森林を考えるシンポジウム(NHK昭和60年6月)

○日本山岳会創立八十周年記念番

組(NHK昭和60年7月)

日本山岳会創立八十周年記念

「会員による山の絵画・写真展」

(写真・羽田栄治)

出品目録

場所 丸の内三菱商事別館

三菱センター

会期 自昭和60年8月19日(月)

至昭和60年8月23日(金)

時間 午前9時半〜午後5時

(最終日は正午まで)

順序は申込順

絵画の部 45点

○早春の槍ヶ岳(油絵) 山里寿男

○穂高(水彩) 古川竹世

○劔岳(版画) 鈴木正俊

○八世紀の石仏とタルチョウハラダックV(油絵) 山口一孝

○レイの中央市場街(水彩) 山口一孝

○ノードラの丘(油絵) 富田弘平

○前穂連峰の五月(油絵) 本多勝一

○春のモンブラン山群(日本画) 原田幹市

○徳本峠(油絵) 三宅次郎

○秩父二子山(油絵) 松本慎太郎

○雪山(水墨画) 辰沼広吉

○霧のモレノ水河(水墨画) 小倉薫子

○湯の平展望台よりの桜島北岳(水彩) 後藤幹次

○大利根早春(油絵) 太田敬

○青く鋭角的な(貼絵) 林 邦明

○妙に赤い朝(貼絵) 林 邦明

○マウンツクック(水彩) 黒石 恒

○初春の白馬連峰(油絵) 榎本 進

○夜明け(水彩) 清野 恒

○奥多摩溪谷の秋(油絵) 直原勝一

○水無月の山(油絵) 岸 栄

○初雪の朝の山岳研究所(水彩) 武田満子

○晩秋の上高地(油絵) 山崎金次郎

○ボカラ風景(油絵) 藤江幾太郎

○ニルギリとアンナプルナー峰(水彩) 山本朋三郎

○潤沢岳の秋(水彩) 早川義郎

○奥穂ジャンダルム(油絵) 斎藤健治

○クワンデを望む(油絵) 江村真一

○谷川岳一の倉沢(油絵) 木村 信

○屏風岩(油絵) 武井 清

○小沢沢にて(水彩) 筒井 稔

○ピークコムニズム北面(水彩) 佐藤知恵子

○劔岳(油絵) 橋本 広

○乗鞍岳(水彩) 中垣淑子

○シルス(パステル) 三栖寿生

○P29:ある日(油絵) 三枝礼子

○カルカに雪が降ってヤクは村へ帰る(油絵) 三枝礼子

○20年後の会員風景(水彩) 石川治郎

○八ヶ岳夕景(油絵) 古谷聖司

○丹沢湖(油絵) 古谷聖司

○越後平ヶ岳(油絵) 牧 潤一

○白い風(エッチング) 渡辺誠司

○早春の大山(油絵) 山岡健志

○ウレリーの部落(油絵) 小原勝郎

○冬穂高(油絵) 平柳 一郎

写真の部(大きさ半切・30点)

○静秋

○デボラ東稜

○紅葉の南会津

○劔岳―赤谷尾根より

○秋差岳のお花畠

○秋色の大江川湿原を行くハイカ

○パイユ峰

○新雪踏んで

○前兆

○八方池と不帰嶮

○霧氷の尾根を行く

○遥かなる谷川岳

○秋の穂高山塊

○サンアントン

○空撮富士山

○赤岳雪景

○今西錦司氏

○不帰の嶮

熊谷とも子

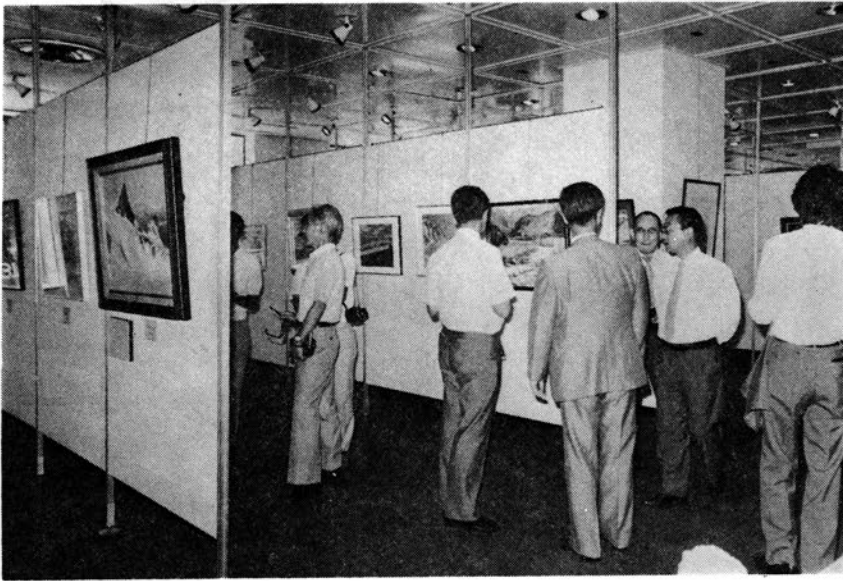
高遠 宏

南川金一

石川治郎

川嶋新太郎

会員による山の絵画・写真展風景／撮影・内田耕作



報告

- 雨上りの槍 原 謙一
○立山天狗岳の北面と南面 野島福三郎
○雷鳥沢を下る 船越好文
○タウチエの夜 広羽 清
○マナスルを背景に往年のシエル パ達 今西寿雄
○荒天 安彦六郎
- ズー・ルフルジュエ渡辺正臣
○エペレスト南西壁 山田圭一
○カラバタールよりエペレスト 田中仲治
○初冬の太台ヶ原 荒木健次
○田代池の初夏 坂本正智
○春の山を行く 松家 晋

日本山岳会創立八十周年記念展覧会

日本山岳会も近い将来には世界に誇れるような山岳博物館を建設したい。しかしそのためには八十年記念展などを契機として、先ず資料集めを行なうてはどうか。こんな話が、佐々前会長や、坂倉、平柳、松田、梅野、中村等の間に起って、記念展の準備が始まった(会報40号四ページ)。

またこの展覧会は商業ベースに煩わされたり、予算を無駄使いしないよう、会場はルームを使用し、飾付や設営も自分達の手で行ってみようということになった。今年に入ると別掲目録のように、山岳会の歴史、図書、ピッケルの歴史、女性登山史、科学装備、高所医学、海外遠征、未来の登山、自然保護、ビデオなど各項目別に殆どすべての委員会からボ

ランテニアが参画し、準備活動が始められた。

特に遠藤、沢井、中川等は素晴らしい会場の設営を、中川会員は会期前後のルームの整理やアルバイターの手配を、また事務局の杉山さんと高橋さんには夏休みも返上して事務処理に当って頂いた。お蔭で目録に見られるような、内容豊富なJACらしい展覧会を開くことができた。ご協力頂いた各位に心から御礼申し上げます。

フリッツ・エルクのピッケルの隣りにはウェストンの写真が掲げられ、ピッケルの形から両者の同一性が示唆されたり、山内、門田の一号ピッケルが隣合せて展示されたりして注目を浴びた。故植村直己会員がマッキンリーの雪洞に残

して来た装備の中には特製のヘッドラングもあり、公子未亡人は、何故日本から出発直前に届けたこの武器を彼は頂上を持って行かなかったのかと涙ながらに話されるという一駒もあつた。田部井会員が女性として初めてエペレストに登頂した際の装備の中には前歯の折れたアイゼンも含まれていた。一方門田の一号アイゼンとか、高野鷹蔵氏の遺稿、上田哲農氏旧蔵のヘスラー、その他、将来の博物館の貴重な資料としてご寄贈頂いた記念品も多々あつた。目録に記して感謝の意を表する次第である。

会員展の様子は八月二十四日(土)NHKテレビでも紹介され、来場者は芳名録に記帖されただけで23名であつた。

八十周年展準備委員(敬称略) 穴田雪江 石井恵美子 池田剛 市川義輝 梅野淑子 遠藤光男 大倉昌身 大橋晋 大森薫雄 岡部みち子 小原俊 勝山康雄 神崎忠男 細川祥夫 熊谷とも子 近藤信行 坂倉登喜子 坂下直枝 佐々保雄 佐藤知恵子 沢井政信 関塚貞亨 高橋詢 高本信子 中保 中川和道 中川武 中村あや 中村純二 布井育夫 早川瑞璃子 平柳一郎 広川健太郎 松田雄一 松永敏郎 村木富士 吉田浩平 (八十周年記念展覧会 準備委員会 中村純二)

日本山岳会八十周年記念

会員による山の絵画・写真展

今回の会員展では会場がなかなか決まらず、三ヶ月前に漸く丸の内に決定した。このため十分な準備ができたとは言えないが、幸い極めて多くの会員から、見応えのある作品の応募が相次ぎ、充実した展覧会となった。関係者として心から感謝申し上げるとともに、大変喜ばしく思っている次第である。

さて、この会場は会期が月曜から金曜となつていたため、記念式典や晩餐会の行なわれた八月二十四日の土曜日や翌日の日曜日を含むことができず、より多くの方々に鑑賞して頂けなかったのは残念であつた。好評に依つて今後もこのような催しは行なわれる見込みなので、今回出品されなかった会員や、見逃された方は次回を期待

海外委員会定例講演会

日時 昭和六十年三月七日
場所 本会ルーム

中村純二

植村直己君のことなど

私の山登り(六十の手習い)に寄せて

講師 吉田 宏氏

私は学生時代を剣道専一に過しましたが、夏、春、冬の二週間前後の練習休みに登山を選んだのが山との関わりを持つ始まりでした。小学校からの仲間、桜内義雄君

などと北アルプスの醍醐味を味わいました。島々の上条孫人、青崎寺の佐伯平蔵(甚三)に案内を頼み夏の穂高や春の乗鞍、白馬、そして立山の彌陀ヶ原でスキー登山を楽しんだこともありました。

私は現在シカゴに本社のある化学会社に勤務しておりますが、十四年前、五十八歳の折ふとしたきっかけで週三回、ジム通いを始めました。通い始めて二年後夏のフランス・アルプスを一週間に亘って登る機会に恵まれました。フランスの登山家ベルナル・ピエールの紹介で、シャモニのガイド、ノベール・ボゾンに一週間付き合ってもらいラツールロンド、グラン・パラディソ、最後にモンブランをイタリヤ側から二泊三日で登りました。これならもう少しやれそうだと、益々ジムに通い、二年後に小西政継、三羽 勝岡君のお世話でマッターホルンの頂上に立つことができました。年を取りますと当然筋力が落ちますが、ジムで最初二・五キログラムで始めたベンチプレスが、二年後には五〇キログラムを挙げるまで回復しました。

マッターホルンを登るにも私なりに準備と努力をしました。先ずその年、二月から七月までの日曜日のゴルフを完全に止め、追浜の鷹取山で岩登りの訓練に励みました。四月末、北アルプスの前穂北尾根、三、四のコルに取り付き、

頂上に向かうところ天候が悪化し、午後三時ころ頂上に着いたのですが、予期せぬビバークをすることになり、頂上の側壁に雪洞を掘り一夜を過しました。東京に戻ってから「技術は別としてスタミナは大丈夫」とマッターホルンへのゴールサインが出たわけですが。

植村直己君とお付合についてですが、植村君が一萬二千キロの単独大横旅行を終えて帰って来たのが一九七六年五月で、その年の夏、日本山岳会で報告会があり、このとき挨拶したのが始めてでした。それから間もなく当時炉端会々長であった交野武一さんに伴われ訪ねて来たのがお付き合を深めるきっかけとなりました。

植村君の最終目標が南極遠征にあると聴き、米政府の外廓団体を、サイエンスファウンデーションを動かすには先ず米国の大衆に顔を売らねばならぬと考え、北極点の紀行文をナショナルジオグラフィック誌に売ることになりました。またスミノニアンのハウチンズ博士を動かして米宇宙局(ナサ)の管轄下にあるニンバス六号という通信衛星を利用させてもらうことになり、機に取り付けたD C Pで植村君の位置の確認に資することができました。北極点到達の直前、磁気アラシに襲われた時も、東京で受信した情報をリゾリユートのベースキャンプに通報することで解決ができました。

一九七八年八月下旬、植村君がグリーンランドの北南縦断旅行のゴール地点、ナルサスワックの北東八十キロに近づいたところ、西堀先生、植村公子夫人と共に現地に参り、氷床よりの撤退に協力しました。現地のアーキティックホテルで偶々私が電話を取ったところ、グリーンランド省より「植村は現在氷床に上っている十七頭のハスキー犬を全部殺して下りて来るように」との命令がありました。後で知ったことですが法律により西海岸ヤコブスハウズズの南六十九度線より南にハスキー犬を入れることは狂大病やトナカイ、羊を襲撃する等の理由で禁止されているとのこと、北南縦断の許可を受けている植村としては、六十九度線を越えることは当然で、誠に乱暴な、しかし残酷なことでありました。早速コペンハーゲンに橋正忠大使を煩わして特別の許可を取り付けることができましたが、このため時間の浪費となり、植村ドッグチームの食糧も底をつく結果となり、さらに引続いて、徹収のための飛行機のトラブルが発生しました。予定していたシコルスキーのヘリはグリーンランド航空の社長と直接電話で交渉したが「ハスキー犬は飛行機を傷める」という簡単な理由でことわられ、それではツインオッター機でということになったが、飛行機は空港に滞地しているにもかかわらず、スキ

東西南北

南ア、白峰三山縦走

―支部有志の交流登山―

加田 勝利

私も沼津かししか山岳会がスキー等で大変お世話になって、宮城支部の方々をお招きし、この夏、会の十五周年記念行事として白峰三山の縦走を行った。また同支部と交流のある岐阜支部と東京からも参加があり総勢二十五名となった。

八月二日、仙台を七時のやまびこで登って参加の吉野慎造氏外七名が三島駅に降り立ったのは十一時。岐阜及び東京組も予定通り集合し、マイクロバスで一路登山口の広河原を目指す。十六時三十分、新装なった広河原小屋に宿をとり、早速河原に集合。自己紹介後、持参した三〇〇本のやきとりと、ホルモン五キロをつまみに缶ビール一〇〇本余を空けた。

八月三日、灯を手に出発。白根御池から仰ぎ見る北岳バットレスは正に圧巻であった。ここから下山する板橋、飯野両氏に見送られ草スベリの急登にかかる。小太郎尾根へとび出すと

三六〇度の展望である。北岳山頂は人々である。花と雷鳥親子に励まされ間の岳へ。ひと休み後、今晚の宿、農鳥小屋へ向けて下り出す。小屋に着くなり吉野氏の音頭で飲み出す。ヘリで荷上げておいたビール、酒、ワインと飲み物はえらく豊富である。概ね飲みほし二十時消灯。

八月四日、今日は仙台へ、そして岐阜へと帰る日だ。星空の下を農鳥へ。山頂でまた乾杯。そして下山にかかる。大門沢コースを下る。林道が近づくころ板橋、飯野氏の出迎えを受ける。早速バスで草塩温泉へ向かい、さっぱりしたところで身延駅前の食堂へ直行。富士よりわざわざ久保田氏が合流。一堂に会して改めて乾杯。好天にも恵まれ、しかも三〇〇本の山五座を縦走したどの顔にも満足感があつた。

参加者 吉野慎造、板橋元一、飯野信、鈴木晃三、高橋 功、千田早苗、相沢基平、佐々木豊喜、森本市郎、秋野子弦、佐藤正雄、斉藤 桂、早川瑞璃子、湯山直文、佐藤隆男、金子誠一、庄司長生、小川喜久、金子しげ子、杉山一男、山本博晴、山本正隆、平井 泰、長谷川広司、加田勝利 (敬称略)

ーが付いていないからと、ことわられまして。憶測ですが氷床に着陸することは技術的に相当困難で危険が多いので、体よくことわられたのではないかと思います。現地オペレーションセンターでは植村ドッグチームの食糧の状況を勘案し、東京本部の許可を取り付け、一万ドルの費用をかけて、リゾートからカナダのツインオッター機をよび寄せることとなりました。ところがその飛行機が到着すると、今度はグリーンランド省の嫌がらせとも思える「その飛行機、飛ぶことならぬ」との指令があり、またまた橋 大使のお世

追悼

伊藤洋平先生を悼む

中島 道郎

雑誌『岳人』創刊者であり、京都大学医学部長でもあった伊藤洋平先生は、去る七月二十六日、腸閉塞のため、此の世を去られた。享年六十二歳であつた。本業でも趣味でも共に一流という人は滅多にあるものでない。そんな偉い先生に、これからもっともって教えて頂けるものと思つていたのに、かえすかえす残念の極みである。

先生は第八高等学校を経て昭和二十二年九月京都大学医学部

話になる破目となりました。極地でのことは常識では考えられぬ不可解なことが多いのだと痛感致しました。

昨年九月中旬再度ナルサスワックを訪れ、愛媛県の彫塑家塩崎宇宙先生の作になるブロンズレリーフを空港ターミナルビルの正面の岩壁に取り付けて参りました(この件については会報47号で報告済み)。

熊本支部夏季例会

本年二回目の当支部山行が去る八月十七、十八の両日、阿蘇の南外輪山で実施された。南外輪山の

裾野に広がる井無田高原の民宿「りんどう」に十八時集合。

標高六五〇メートルの高原はさすがに涼しく秋の気配さえ感じられる。夜は例によってビール、焼酎で遅くまで話がはずむ。

翌朝、車に分乗して一路登山口へ。

車の底をこすりながら林道を上り、九時、東大矢の登山口に到着。夏草をかき分けマムシに用心しながら三十分で駒返峠に着く。

峠に出るとヒンヤリとした風が汗ばんだ肌に心地よい。道はここから原生林の中のゆるい尾根道となる。今回のコースは南外輪山に

を卒業されたのち院生として微生物学教室に残っておられた。私は二十四年に京大に入学したのだが、二十六年夏の穂高合宿には先生にコーチとして参加頂き、ご指導を仰いだ。さらに二十七年の暮、先生をリーダーに、当時日本に残されていた唯一の未踏地、知床の山々へ登った。初めて体験する、それは酷しい山行であつたが、一生忘れられない思い出である。

三十六年八月シアトルにお訪ね

あるいくつかの外輪越えの峠のうち、その核心部ともいえる駒返峠から高千穂野まで尾根通しに辿るもので、九州自然歩道にも組み込まれている、原生林の中の静かな山行である。時折、樹々の間から見える阿蘇五岳や九州背梁山地の眺望を楽しみながら多津山峠、天神峠と進んで行く。かつては「阿蘇道」と呼ばれ、阿蘇の南郷谷と南麓の矢部を結ぶ要衝であつたこれらの峠も、今は訪れる人もないのか夏草に埋れひっそりと静まりかえっている。天神峠から急勾配の階段を登りつめ十一時半、高千穂野(一一〇一)に着く。

ここは南外輪山のほぼ中央に位置し、天孫降臨の伝説もあるところで、頂上台地の北側が切り開かれ、視界が開ける。眼下に夏の陽に輝く南郷谷と、その背後に雄大なスケールで展開する阿蘇五岳の眺望は実に素晴らしい。一時間以上も時を過ごしてしまつた。

参加者 奥野正玄 和仁古昇 大木野徳敏 大木野マツ子 樋口格 樋口洋子 中村恵二 川上洋子 田上敏行 (田上敏行)

会務報告

八月理事会

8月12日 午後6時30分

場所 私学会館会議室

出席者 今西会長、山田、大塚副会長、嶋原、橋本、大橋、松永、

浜口、高遠、新井、太田、鈴木、平井、大森、村木、絹川、関塚各理事、松田、中村、宮下各評議員委任 竹田、金坂監事

審議事項
●宮崎支部設立承認の件
提出書類により審議の結果、承認

●東洋大学・パキスタン山岳会合同K2登山隊一九八七年の都岳連への推薦状交付について 承認報告事項

●各委員会報告
●自然保護全国集会十月十九・二十日

●医療・集会・婦人懇談会・科学委員会共催で「登山中の栄養と食物」講演を十月二十四日ルームで開催

●「ヒマラヤの生態系」シンポジウムを日ネ協会と共催で十一月三十日に中野サンプラザ会議室で開催

●八十周年記念式典、晩餐会関係について、出席者、招待者、会議次第、トライビジョンについて報告。

●八十周年記念会員による絵画・写真展と記念展について

ルーム日誌

八月

5日(月) 晩餐会準備委

12日(月) 理事会

15日(木) ルーム備品移動

22日(木) 27日(火) 創立八十周年記念展

圖書受入報告

圖書委員會

昭和 60 年 2 月分受入図書 (つづき)

8. 地図 “Alpenvereinskarte, Zillertaler Alpen Nr. 35/1” 1976
(岡沢祐吉氏寄贈)
9. 地図 “Alpenvereinskarte, Ötztaler Alpen, Weisskulgel Nr. 30/2” 1980 (岡沢祐吉氏寄贈)
10. 地図 “Alpenvereinskarte, Kaisergebirge Nr. 8” 1976 (岡沢祐吉氏寄贈)
11. 地図 “Alpenvereinskarte, Mount Everest Nr. 0/2” (ドイツ山岳会会長寄贈)
12. 地図 “Alpenvereinskarte, Nanga Parbat Nr. 0/7” 1980 (ドイツ山岳会会長寄贈)
13. 地図 “Alpenvereinskarte, Cordillera Huayhuash Nr. 0/3 c” (ドイツ山岳会会長寄贈)
14. 地図 “Alpenvereinskarte, Cordillera Blanca Nr. 0/3 b” (ドイツ山岳会会長寄贈)
15. 地図 “Alpenvereinskarte, Cordillera Blanca Nr. 0/3 a” (ドイツ山岳会会長寄贈)
16. 地図 “Topographische Karte, KOH-EPAMIR 1 : 50000” (ドイツ山岳会会長寄贈)
17. Jiang Liu “China’s Largest River” Foreign Languages Press 1980 (佐々保雄氏寄贈)
18. 明治大学山岳部戸辺会編 「極北に消ゆ, 植村直己捜索報告追悼集」 山と溪谷社 1985 (編者寄贈)
19. 北海道大学体育会山岳部編 「北大山岳部 12 報 12 号」 1985 (編者寄贈)
20. 富山県立図書館編 「中島文庫目録」 1984 (版元寄贈)
21. 地図 “MINAPIN NW-KARAKORUM” Institut für Angewandte Geodäsie 1967 (ドイツ山岳会会長寄贈)
22. 地図 “HOHER HINDUKUSCH AFGHANISTAN” Kartographische Anstalt Freytag-Berndt und Artaria 1972 (ドイツ山岳会会長寄贈)

終身会員へ

退会

4
2
7
7

7
3
7
8

4
6
8
8

物故

24
日
(土)

24
日
(土)

今月の来室者476名

にて

餐会（椿山莊にて）

創立八十周年記念晩

応募口数累計

正夫 增岡栄

和男 岡部み

7

八十周年

3029
渡辺

1730 浜野

1590 田口

4048
坂井

四二六八・七口

本橋淳次

(二) 新谷

.....

心事業第二次募金

兵力

正男

二郎

真

願いたします。

※お申込みいただいたまま未送金

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
280
281
282
283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
300
301
302
303
304
305
306
307
308
309
310
311
312
313
314
315
316
317
318
319
320
321
322
323
324
325
326
327
328
329
330
331
332
333
334
335
336
337
338
339
340
341
342
343
344
345
346
347
348
349
350
351
352
353
354
355
356
357
358
359
360
361
362
363
364
365
366
367
368
369
370
371
372
373
374
375
376
377
378
379
380
381
382
383
384
385
386
387
388
389
390
391
392
393
394
395
396
397
398
399
400
401
402
403
404
405
406
407
408
409
410
411
412
413
414
415
416
417
418
419
420
421
422
423
424
425
426
427
428
429
430
431
432
433
434
435
436
437
438
439
440
441
442
443
444
445
446
447
448
449
450
451
452
453
454
455
456
457
458
459
460
461
462
463
464
465
466
467
468
469
470
471
472
473
474
475
476
477
478
479
480
481
482
483
484
485
486
487
488
489
490
491
492
493
494
495
496
497
498
499
500
501
502
503
504
505
506
507
508
509
510
511
512
513
514
515
516
517
518
519
520
521
522
523
524
525
526
527
528
529
530
531
532
533
534
535
536
537
538
539
540
541
542
543
544
545
546
547
548
549
550
551
552
553
554
555
556
557
558
559
560
561
562
563
564
565
566
567
568
569
570
571
572
573
574
575
576
577
578
579
580
581
582
583
584
585
586
587
588
589
590
591
592
593
594
595
596
597
598
599
600
601
602
603
604
605
606
607
608
609
610
611
612
613
614
615
616
617
618
619
620
621
622
623
624
625
626
627
628
629
630
631
632
633
634
635
636
637
638
639
640
641
642
643
644
645
646
647
648
649
650
651
652
653
654
655
656
657
658
659
660
661
662
663
664
665
666
667
668
669
670
671
672
673
674
675
676
677
678
679
680
681
682
683
684
685
686
687
688
689
690
691
692
693
694
695
696
697
698
699
700
701
702
703
704
705
706
707
708
709
710
711
712
713
714
715
716
717
718
719
720
721
722
723
724
725
726
727
728
729
730
731
732
733
734
735
736
737
738
739
740
741
742
743
744
745
746
747
748
749
750
751
752
753
754
755
756
757
758
759
760
761
762
763
764
765
766
767
768
769
770
771
772
773
774
775
776
777
778
779
780
781
782
783
784
785
786
787
788
789
790
791
792
793
794
795
796
797
798
799
800
801
802
803
804
805
806
807
808
809
810
811
812
813
814
815
816
817
818
819
820
821
822
823
824
825
826
827
828
829
830
831
832
833
834
835
836
837
838
839
840
84

.....
死募者ニ芳名

1593 加治 甚吾

1574 伊藤 紀克

3721 平沢亀一郎

八十周年記念事業第二次募金応募者（芳名）

(昭和六十年九月九日まで、敬称略、順不同)

金額累計二、三四三、七三三円
※お申込みいただいたまま未送金
の方は至急お払込み下さるようお願いいたします。

お知らせ

●ドイツ山岳劇映画

(銀嶺に帰れ)の夕べ

脚本、監督、主演、ルイス・トレンカー、共演。マリア・アンデルガスト、一九三七年、ドイツ・ユニバーサル映画。

日時 十一月十五日(金) 六時半
場所 本会ルーム

山岳映画の創始者、アーノルト・ファンクの後継者、ルイス・トレンカーの劇映画を上映します。今後、本邦で上映されることはないと思われます。この機会にお見逃しないう。なお、これは会員懇談会も兼ねます。

海外委・総務委員会

●現地小集会

色々な味わいのある山を企画してみました。興味のある山にいつしよに行きましよう。参加をお待ちしております。

一、米子沢

長いスラブの沢登り。頂上付近は草原と池塘。健脚向。

日時 十一月三日(日) 七時 清水部落集合 日帰り

ルート 六日町→清水→桜坂→米子沢→頂上→清水(歩行時間九〇分)

地図 越後湯沢(五万図)

二、石老山(六九四〇)

誰でも楽しんで登れるのびやかな山。六十年の忘年山行。のんびりした山行を好まれる方歓迎。

日時 十二月二十二日(日) 相模湖駅九時集合 日帰り

ルート 相模湖駅→石老山入口→顕鏡寺→石老山→大明神→鼠坂→相模湖駅(歩行時間三時間、地図 上野原(五万図))

三、独鈷山(二二六六)

ピッケルとアイゼンの必要な急峻な山。日本離れた風景。

日時 二月二日 信越線上田駅十時集合 日帰り

ルート 上田駅→中禅寺→不動滝→独鈷山→中禅寺→上田(歩行時間四〇分)

四、愛鷹山

静岡の誇る名山。北に富士山、南に駿河湾を見下ろす展望に恵まれた山。

日時 三月九日(日) 御殿場駅前九時半集合

※九月号の会報に御座山とご案内致しましたが、愛鷹山に変更させていただきます。

申込 山岳会事務局

詳しくは集委員会までお問い合わせ下さい。

集委員会

シンボジウム

●高所登山におけるアルパイン・スタイルの問題について

日時 11月27日(水) 18時より

場所 ルーム 参加費 千円

司会 坂下直枝 講師 重広恒夫 和田城志 山本宗彦 賀集 信(未定)の諸氏

高所登山委・海外委共催

シンボジウム

●ヒマラヤの生態系と自然

日時 11月30日(土) 13時30分より

場所 中野サンプラザ集会室8F 会費 千円(予稿集)。

なお17時30分よりの懇親会出席者のみ11月15日までに電話かハガキで申込むこと(会費五千円)

科学委・自然保護委

エーデルワイス・クラブ

「山と花」写真展

日時 十一月二十三・二十八日

十時~十九時(最終日十八時)

場所 新宿 野村ビル一階

ギャラリ

昭和六十年十月二十日発行

102 東京都千代田区四番町五〇四

サンビュウハイム四番町

発行所 法人 日本山岳会

発行者 今 西 寿 雄

編集代表 岡 沢 祐 吉

電話東京(03) 四四三三

振替口座 東京三〇八二九番

東京都港区赤坂一丁目三番六号

印刷所 株式会社 技報堂